

地域が創り育てた公共交通

コミュニティ タクシーが往く!

山口県山口市



山口県

山口市

人口減少とマイカー利用者の増加による採算悪化から、地方の公共交通が撤退していく中、通学や高齢者の買い物・通院などの移動手段の確保は、多くの自治体で深刻な課題となっている。

その解決を目指し、市民の移動手段は「行政が確保する」のではなく「みんなで創り育てる」という姿勢を打ち出し、地域との真剣な話し合いの中からユニークな方法を生み出した自治体がある。タクシーを公共交通と位置づけ、地域住民主体で“コミュニティタクシー”を運行させた山口市である。

●運営すべてを地域に任せる

山口県の交通の要衝となる新幹線・新山口駅を擁する山口市小郡地域で平成19年12月、“コミュニティタクシー”の運行が始まった。その名は「サルビア号」。運営主体は高台地域の10自治会（約1,400世帯）で組織された「サルビア号を育てる会」である。

「昭和40年頃から開発された高台の住宅団地では住民の高齢化が進み、旧町時代から移動の足を求める声が上がっていました。地域に強い要望があったからこそ、早い段階での運行が実現したのだと思います」と話すのは同会・前会長の國安克行さん。小郡地域に続き、平成20年に6地域、22年に1地域でコミュニティタクシーが走り始めた。

都市部、農村地帯など土地柄はさまざまだが、タクシー会社と契約を結び、ダイヤや運行ルートを決め、収支を取りまとめる役割は、すべて各地域で組織された協議会が担い、市は各地域に担当者を配置しての支援に徹する。「ダイヤ変更のときは、終バス運行後、会の役員20人で手分けして、バス停の時刻表を付け替えます」と國安さん。

本格運行にあたって、市は3年以内に乗車率*・収支率*ともに30%以上を達成することを条件とし、70%は行政が補助することとした。「サルビア号の場合、運賃収入だけでは条件を満たせませんから、1世帯につき年間1,000円の協賛

金をいただくことにしました。『利用しないのになぜ金を払うのか』という意見もありましたが、話し合いを進めていくうちに『近い将来お世話になるから』という声が多くなりました」。

平成18年の道路運送法改正によって、定員10人以下の車両を使った乗合タクシーも乗合バス事業に参入できるようになった。加えて、ダイヤやルート、バス停の位置変更が容易で、狭い道でも小回りがきく。そこに着目して誕生したコミュニティタクシーは、名前こそ「タクシー」だが、制度的にはバス。目的地に直行せず、ルートどおり回り道をするに、当初は戸惑う利用者も多かったが、便利さの周知が進み、平成28年3月、サルビア号は10万人乗車を達成した。

*乗車率=1便あたりの乗車人数÷使用車両の定員
*収支率=(年間乗車人数×正規運賃+協賛金等)÷運行委託費



コミュニティタクシー「サルビア号」10万人乗車達成記念

山口市 人口 195,733人、世帯数 86,640世帯 (平成30年8月1日) 平成17年10月、山口市、小郡町、秋穂町、阿知須町、徳地町の1市4町が合併して誕生。平成22年1月には阿東町を編入し、北は島根県に接し、南は瀬戸内海に臨む1,023.23km²の広大な面積を有する市となった。「西の京・山口」としての歴史を誇る土地柄であるが、近年、メディアアートの拠点施設「山口情報芸術センター」が全国の注目を集めている。

サルビア号が行く!

小郡地域の高台は海拔40~70m。長い坂道は高齢者でなくてもつらい道。この高台にある住宅団地を5カ所ほど回りながら、国道沿いのショッピングセンターや病院、小郡支所などをつなぐ。団地内は乗り降り自由。走行距離は1便往復11km。1日4便で、タクシーメーターを基準にするとタクシー会社に支払う額は3万4,000円ほどとなる。9人乗りに平均6人が乗っている。運行日は月~土曜日。



▼市役所支所に到着



▼自由乗降区間内では、降りて数歩で自宅。「ほんとうに助かります」



自由乗降区間

▼出発地点の光が丘急坂が多い



▼細い急坂を上り下り



▲大型商業施設では続々と乗車



▲大型スーパー前での乗降



▲団地の奥へくねくねと

▼病院前の停留所



◀国道沿いのスーパーの駐車場に設けられた屋根付き停留所



周防下郷駅

新山口駅

サルビア号を育てる会・前会長の國安克行さん。旧小郡町職員退職後、自治会長に就任。行政にも地域にも精通しているからこそ、地縁の薄いいくつもの団地の意見をまとめあげ、コミュニティタクシー運行に貢献した。





夏休みの車内は、お孫さんを連れてお出かけするおばあちゃんたちで道中にもぎやかに

◎“コミュニティタクシー”誕生まで

山口市では、合併を機に「市民交通計画」を策定した。策定にあたって、交通ジャーナリスト・鈴木文彦氏や現大阪大学教授・森栗茂一氏などの有識者等で構成する「山口市交通まちづくり委員会」を設置し、市民や交通事業者も議論に参加した。その中で持ち上がったのが、コミュニティタクシーの導入案だった。

しかし、これに大きな抵抗を示したのが当のタクシー事業者。旧山口市が過去にコミュニティバスの運行を開始した際、事前調整が行われなかったという彼らの苦い経験が、行政への不信感となっていた。今回は綿密な事前調整が行われたが、反対の理由は、営業への影響の懸念だった。しかし、運行を望む住民たちの熱意に加えて、市が「タクシーは公共交通」と位置づけて計画の中に組み込んだことが事業者から評価され、

事業は円滑に回り始めた。

市民交通計画では、コミュニティ交通は地域が主体となって整備するという方針が打ち出された。「旧市町時代から、自治体が各地域で生活バス（コミュニティバス）を運営していますが、徳地地域の藤木地区では、生活バスの一部ルートを平成22年4月からコミュニティタクシーに移しました」と話すのは、市交通政策課の田邊幸治さん。このタクシーは、点在する集落と生活バスや路線バスの停留所までをつなぎ、朝夕は中学生も通学に利用する。「生徒が1人卒業しただけで、乗車率が大きく変化し、バス停も変わる地域です。このような地域は、乗車率・収支率の条件を30%ではなく25%にしています」と田邊さん。

平成20年から、人口の少ない地域でグループタクシーの運行も開始した。申請制で、バス停から一定距離以遠に住む高齢者にタクシー利用券が交付され、グループで乗ればより安価に利用できる。

山口市内のコミュニティタクシー導入地域

現在は7地域で運行中。地域の住民が自分たちの課題として考え、地域の特性やニーズにあったルートやダイヤに改善しながら運行している。



1



3



4

藤木おたっしや号発車!

徳地地域の藤木を発車した「おたっしや号」は、集落を回り生活バスや徳山駅行き路線バスの停留所がある「ロハス島地温泉」までを走る。日に6便(月～土曜日運行)だが、昼間は予約制となっている。

1 取材した便の予約はお一人様。「このタクシーはそりゃありがたい」と満面の笑み。今日は島地の農協に行くという。2 ロハス島地温泉停留所。3 おたっしや号の運転手・原田さん。車を走らせながらあそこの家は洗濯ものを干しているか、田んぼに出ているか…と集落の人々を見守っている。車内では乗客の話に耳を傾け、情報交換をする。「タクシーだから、車が通れる道がある限り、なるべく玄関の近くまで送ります」。4 徳地地域の藤木は山間の集落。山を登ったところに耕地と家屋が点在している。



小郡地域「サルビア号」出発式（平成19年12月）



公共交通ふれあいフェスタ

運転免許返納を考えている高齢者のための講習会
（モビリティ・マネジメント）



小学生対象の公共交通教室。路線バスの基本的な乗り方・降り方などを実際に体験することで、バスに対する興味や親しみを持たせる。クイズや説明を通して楽しくマナーや交通安全への理解を深め、バス利用の機会を増やすことを目的に実施している

◎持続可能なシステムを目指して

平成27年8月、秋穂地域のコミュニティタクシーの運行が終了した。担当していたタクシー会社が運転手の高齢を理由に廃業したのである。平成20年の運行開始時には考えてもみないことだった。平成30年現在、市内のタクシー事業者は17あるが、行政から委託され、スクールバス等の運行を行っている会社も多い。運転手の不足と高齢化は交通システムの持続可能性を危うくする深刻な問題である。

この解決を業者だけに負わせられないと、市は平成31年1月、交通事業者や国・県と協力して、公共交通車両の運転体験会を実施する予定だ。ふだんは運転できないバスやタクシーの運転体験を通じて運行業者と交流する機会をつくり、住民の中から次の運転手を見出し育てるといった試みである。特に子育てが一段落した女性などの参加を期待しているという。一方で、市民の7割が年に一度もバスを利用していないという現状を踏まえ、小学校での公共交通教室をはじめ各種イベントを通して、市民の公共交通への関心の喚起に努めている。

現在、コミュニティタクシーが運行されている

のは21地域中の7地域。なかなか広がらない。市交通政策課の尾中孝課長に今後の見通しを聞いた。「『30%達成がたいへん』、『地域内運行が原則で他地域に行けない』などの意見も多く出ていますので、今後はより導入しやすいやり方を検討し、コミュニティタクシー事業のガイドラインも作成する予定です」。その一方で、運営を担う人材の育成の必要性も痛感しているという。前出の森栗教授の「コミュニティタクシー事業は、同じ地域の困っている人のために行っている住民ボランティア活動。輝き出したこの力を消滅させてはいけません」という言葉を重く受け止め、これを持続させていくため、行政はどう支援していくかを模索している。

山口市では、市を挙げて交通問題に正面から向き合い、深く掘り下げた。その結果、地域も役所も「交通不便地域の住民サービスをどうすべきか」という抽象的な議論の段階を脱し、「運転免許がなく、膝も痛いと言っていた〇〇さんはどうすれば買い物や病院に行けるだろう」と、身近な人間関係の中で一人ひとりに向き合った解決策を探ることで、目に見える変化を起こしてきた。地域の課題にどれだけ具体的に深くコミットできるか——そこに解決のカギがあることを、コミュニティタクシーの運用事例が示している。

【取材・写真協力 山口市都市整備部交通政策課・サルビア号を育てる会・島地タクシー・湯田都タクシー】



写真の佐山地域のほか小鯖地域、嘉川地域、阿知須地域では4人乗り車両での運行